



婦女鑑

二

9  
3924  
2





門 口 9  
號 3924  
卷 2



婦女鑑卷二

目錄

蔡人妻

陳堂前

王受命妻

波立的那の妻塞斯達

百斯加拉侯匪地難多の夫人微多利

安弗拉斯曼

馬屈利多

亞耳巴地侯の夫人

婦

鑑

卷之二

目錄

宮内省藏

藏

早稲田 大學 図書館  
第 29.4.23 文  
藏 書



脱勒邊夫人の夫人

任善德弗の妻

拔克蘭呼倍爾哈米爾敦の妻

奈蒲爾彌爾發拉第の妻

鐘尾ふで女姉妹

二村清助妻衛女

婦女鑑卷二

蔡人妻

蔡國の人某の妻を。もと宋人の女なるを嫁して  
 後。夫惡疾小罹きりしを。女の母くくるよあら  
 ぬ事よねをひて。こと人よ改め嫁せしめむとい  
 ふを。女必なびていむく。今夫の不幸よくねる  
 を。やめて妾が不幸なれば。いふでかこと人をと  
 ためて。何らため嫁すること。をなす侍らん。おほ  
 よそ夫婦の道を。ひときび醜まれば。終身あらと



めずときく。ひまると夫不幸にして。何しき疾小  
かゝるも。その身は悪事あるふあらず。又妾を去  
つるの氣色を侍らず。さるをこれを去て。改め  
嫁せんを。婦女の道なごへり。而の菜菔といふ  
草をとる。そのを見給はずや。この草惡臭何き。バ。  
始をこれを采るもの。其臭をひとふさまなれど。  
やうくなるれば。こきを袖ふ。こきを懐みして。  
ふへりて志こゝむさまのみゆるものかり。況や  
夫婦の道なごいて。始めをこれ親し。後よを  
おきを去つるの理あるべからずとて。母の意小

志たごはず。その節操を全うし。菜菔の詩を作り  
てその志を述べけり。

陳堂前

陳堂前。宋の漢州の雒縣ラウケンといふところの。王氏  
の女なり。十八歳の時小。同トところの陳安節と  
嫁して子をうめりし。やど外く夫を身まのわ  
り。舅姑年ねひて子よわられ。力なくこえられ  
ど。堂前涙をもらひていさめけるを。ひま夫身ま  
りぬきだ。さこそ便なうおますらめ。されどお  
げきてもうへらぬことなきだ。いひよともまきべ





楓  
湖  
画



陳  
堂  
前  
酒  
肆  
小  
女  
を  
贖  
ふ



さやうなし。これ後をわらひ夫ふりて。何事  
 もよきまをうらひまをまべけまば。さむのりあ  
 歎き給ひそ。といへど。舅姑ともふろこびて。こ  
 しそのいふごとくならバ。わの子なほ世ある  
 よおなとて。喜ぶこと限りなく。かくて葬の事  
 をへて後を。他事なく之の事へ家事を治めて怠  
 るおとなく。まその子を撫字し。師をえらびて  
 學むせけまば。長ずるよ從ひて學業大なるみ。  
 竟に大學ふ入りて。不幸ふして三十歳まで身  
 まかりけり。孫二人ありて。一人を綱といひ。一人

を綴をひひる。いづまも學問の志篤くして。人  
 ようらまけり。是よりさき。堂前初めてこの家よ  
 嫁せしとき。夫の妹ありて。年なををさかありけ  
 り。堂前ふまをいたるり字おひて。やうく年ざか  
 りふなりければ。いと懇こころよ。おちなくくろを竭  
 して。人の家よ嫁をしぬ。あて舅姑を身ま  
 めりて後。あの妹舅姑の財産を分ち與よと乞ひ  
 たるよ。快よくうけひきて。いさくも各それぞれおこと  
 かく。家財をわらちて。おほくこれふあふふ。  
 僅の五年むかりの間。その夫の爲よことぐく



消費せられて。その身もよるべなきまでなりぬれど。せんうさなく先非をくいて。あううび堂前も憐を乞ひたり。堂前まゝ爲よ田宅を買ひ求め。これふをらしめ。その所生の甥をやりおひて。わぶ子のごとくど何もせとる。すべてあくのごとく。親族よ貧窶のそのあまは。その子弟をわぶ身よひさうけて養ひそぐて。おのく婚嫁せしめけまは。その數三四十人の多きお及びて。數里の間をその親族ならざるはなし。中よも甘氏とひへるを。縁故あるそのなるお。家いと貧しく。

ひとりの小女あり。酒肆よ質とし。その雇錢をえて。やうくその日をねくりけり。堂前深く之を憫み。金若干をいだし。この女を贖ひ。人よ嫁せしめたるなど。實よ殊勝なる行とぞいふべき。されば郷里の人。その恩義お感し。陳堂前とよびて。わぶ母を敬ひたふとむおごとくなりき。その子孫堂前の遺訓よ遵ひて。五世の間同居して。ひとむつましく。孝悌の聞えたあ。儒業の譽おくれなりなり。これよよりて。乾道九年といふと。時の朝廷より詔ありて。其門閥よ旌表せら

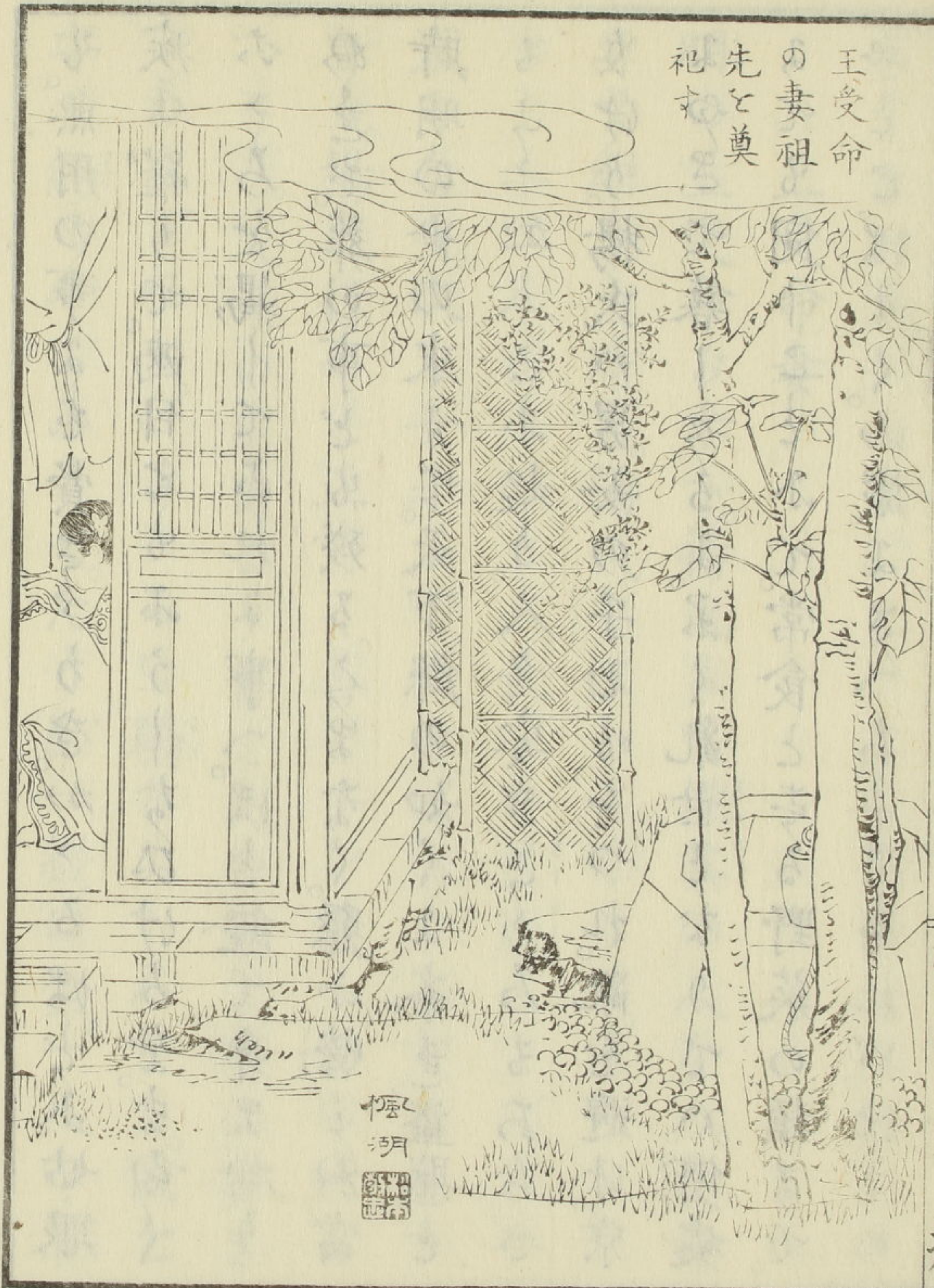


明の王受命の妻を。楊氏よて潭集タンシツの人なり。受命  
 身まかりし時を。楊氏なほわのくして。そのうめ  
 りし子二人有りけるが。長子の星歳セイサイとよびて八  
 歳となり。次を女子よて六ッぼのりみぞなまきり  
 くる。楊氏行心と正しく。善く子を教へ。姑よはる  
 へり。父母の家固より富こ。夫の家もまゝ貧き  
 よあらざれど。いさゝるも驕オウるおろなく。儉を  
 守り給タマやうふして。たとひ一錢の金。一尺の帛キヌ

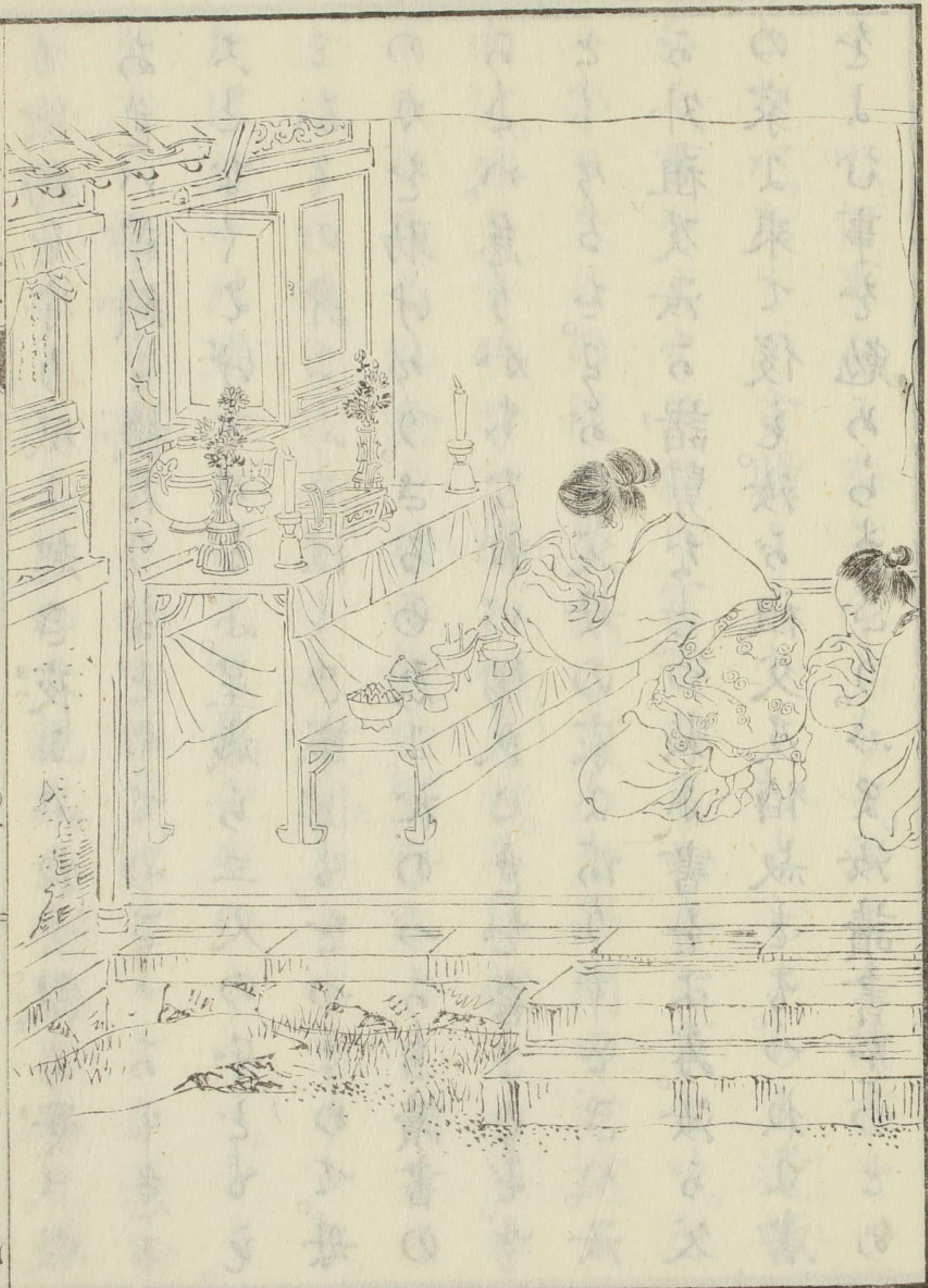
も。無用の事をも費さるゝわき。かゝるほどふ。姑眼  
 疾カも罹りて。兩目ともふうになひけるを。まゝく  
 おろろを竭しておれよ事へ。ほど經て身まかり  
 むまを。葬の事ども残るゝまなく。懇小營コンの當  
 時明の世の末よて。天下絲の如くよ。素スま。盜賊ど  
 むころか。ころ小起り。人々安きころもあらざ  
 りけり。楊氏の男女の子どもをつれ。亂を避け。京  
 よゆきて暮しなるよ。果く亂世となりてハ。何處  
 むても同トことふて。常食とまる野菜の類まで。  
 ひととぼしく。凶歳よさへあさりをれば。たとめ



王受命  
の妻祖  
先と奠  
祀す



楓  
明  
印





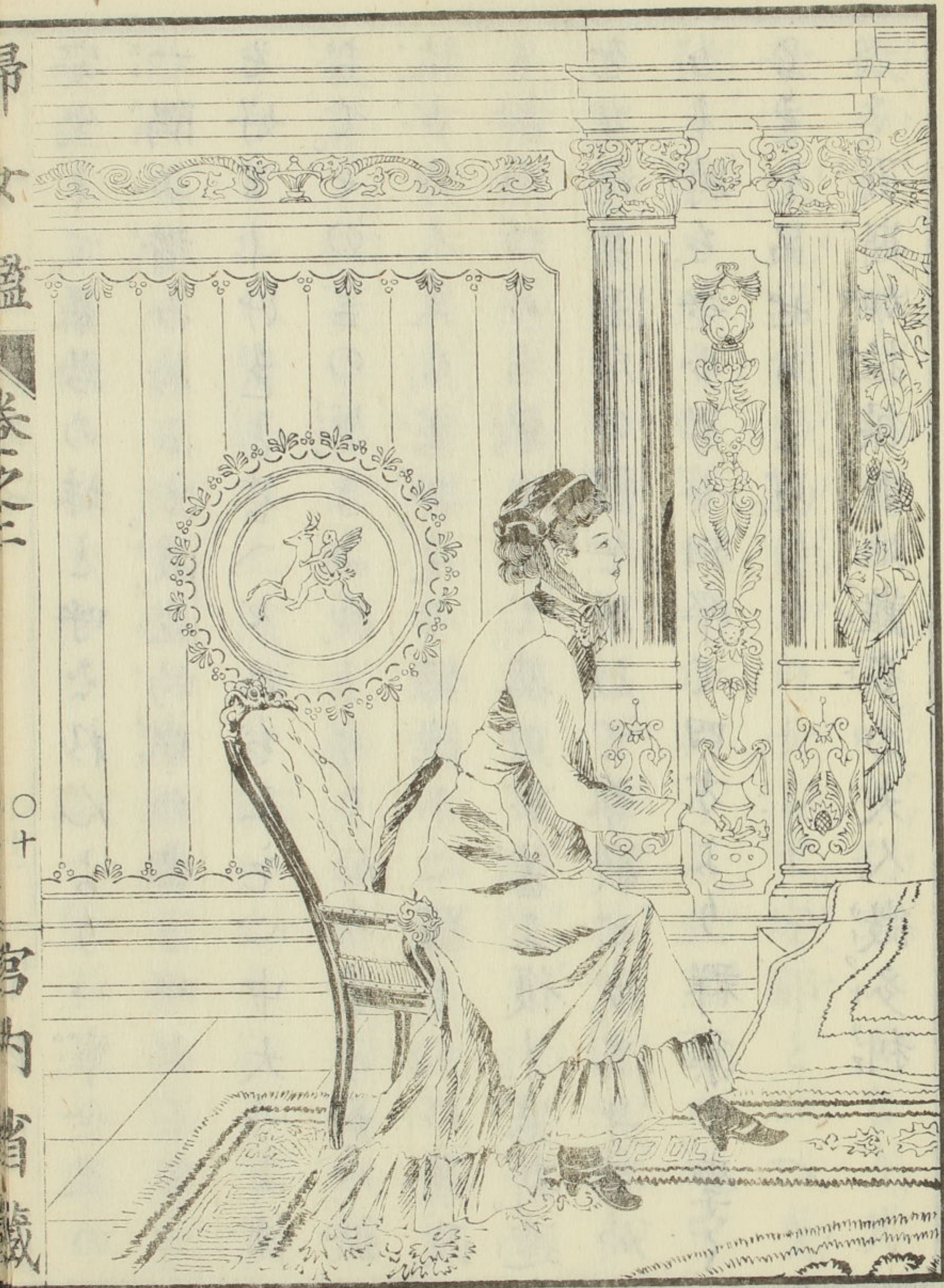
て儉約を守り。夙よ起き夜よひねて親ら饜き。暇あきば学績之機たりなどして。ひさしくも急るふとなくまげこゆるふ。星歳ら二人の子どもに。ふかその身よふさはしき事どもをつとめて。母の力を助けたり。さるゆゑよ。たのづから讀書のふさひ。急りがちなれば。楊氏こまを喜こむぞ。そとこゆるを。その身父母の家よりしときい。汝が外祖及汝が諸舅など。つねふ書をよみ。汝が父の家よ来て後を。汝が祖父及伯叔とも。つねふ書をよむ事を勉めらまふり。ひま汝讀書をつとめ

ずして。何事をのなさんとまゐる。汝よく讀書をつとめば。たとひ貧賤よりるしむとにさらよ遺憾なく。書をよまざれば富貴なるも喜ぶ事なく。こひひたり。この後を星歳。こゆるを學問の一途よ向け。外よもひさしく學びけまひ。そ此行をいと正しありき。これ全く母の教の宜きよよまひ。さて世治りて後。こゆる。こゆる演劇などありゆるを。おほくは此婦女を好きて見よものしつゝ。をりをおひ楊氏をもさそひられど。ほどよくおとわめてゆゑのざりたり。されど親族の交際などい。禮

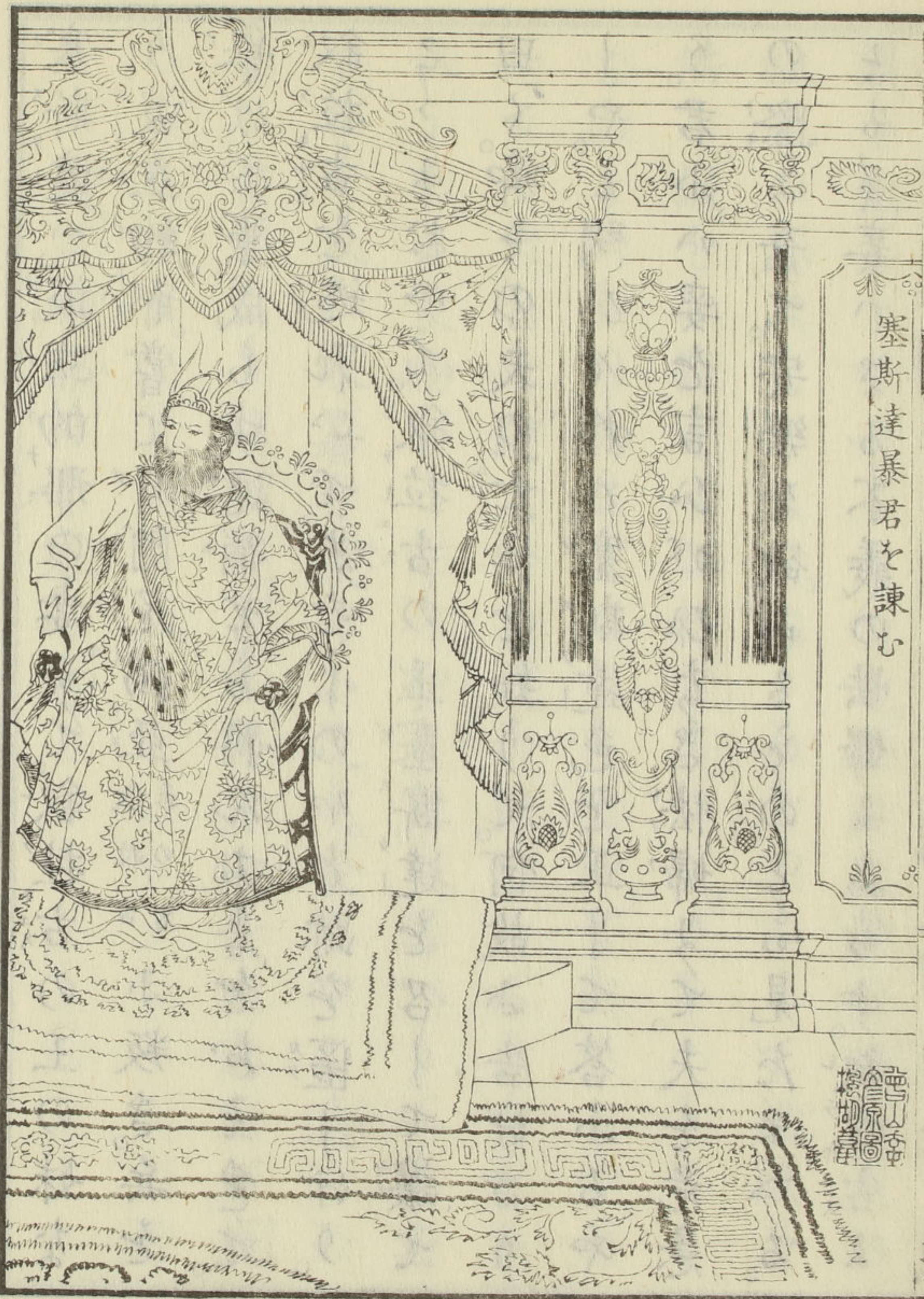








〇十



塞斯達暴君を諫心

徳山香  
繪



安坐して暴君の妹と呼ぶれんよりハ。寧世界の  
 一隅小潛み居るも。波立的那の妻と呼れん事こ  
 そ好ましけきと答へられど。王も心中大いに愧  
 ぢて。その言の屑さ小感とり。かゝりけきバ。叙  
 拉古の人民も。塞斯達の婦徳小心服し。王の暴政  
 もおのづから革まりて。萬の事舊より復し。塞斯達  
 をぞ終身王后の禮を用ゐて尊敬せり。其身まか  
 りし時を。老少男女相率て四方より群集し。厚く  
 こきを吊せりとぞ。

百斯加拉侯匪地難多の夫人微多利

微多利を。那不勒國の大將。哈布利若の女なり。其  
 母を亞昆諾侯。弗勒得かの女めて。安那といへり。  
 微多利を。一千四百九十年のころ。亞里那の城中  
 小生じ。年甫て四歳のとき。百斯加拉侯匪地難多  
 と。婚姻の約を結べり。此時侯も亦微多利と同年  
 までありき。微多利を其父母。いと嚴とか小之を  
 教育し。稍長する小及で才藝人に勝じ。容顔妙秀  
 なり。これバ。諸國の王侯之を驍せんと欲するも  
 の。いと多けれど。微多利の節操正しき性質おま  
 ば。かりふも他よ心を移さざ。斯て雙方十七歳の



春を迎へられバ。前約を踐<sup>ツ</sup>てめでたく婚儀を行ひけり。侯を毎<sup>ニ</sup>其夫人の微多利と才藝を競<sup>ヒ</sup>ひ。かゝると小愛すること最も深く。後四年の間を以<sup>テ</sup>斯底島の別業<sup>ニ</sup>ありて。ひとたのしく年月を送りけり。あつるほど小羅馬の教皇如利亞二世。伊太利諸國を合從して。法王路易第十二世と。戦端を開<sup>ケ</sup>り。此時侯を日身曼帝の軍小加<sup>シ</sup>り。拉威那の戦<sup>ニ</sup>。その齡僅<sup>ニ</sup>二十一歳<sup>ニ</sup>。騎兵隊の將となり。戦利あらざりて擒<sup>メ</sup>となり。米蘭<sup>ニ</sup>拘留せられり。あつてうき月日を過<sup>シ</sup>はほどふ。

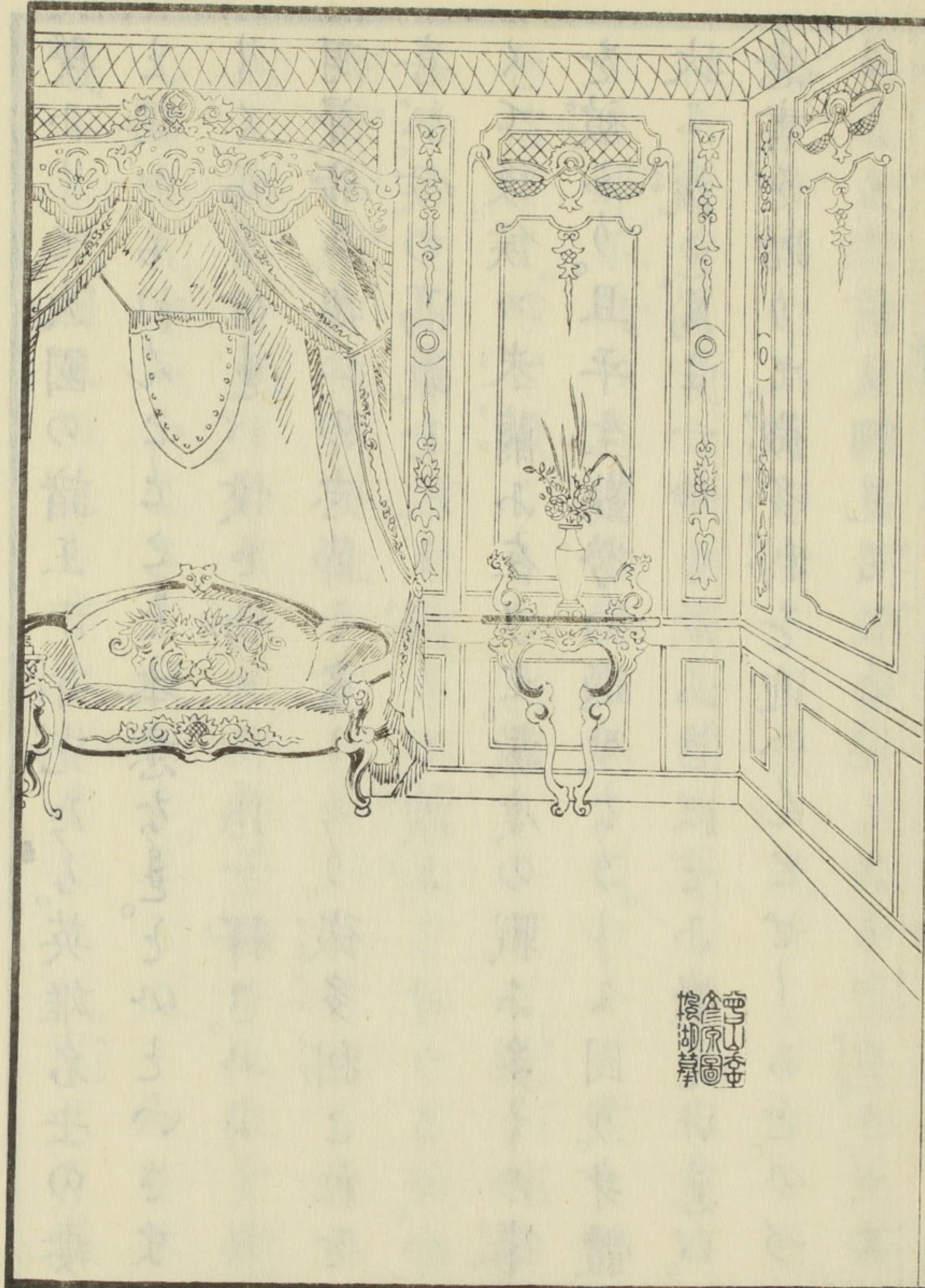
や一年ももなりりる。微多利此許<sup>ニ</sup>小書を贈りて。久しく相見ること能<sup>ハ</sup>ざるを歎<sup>シ</sup>されど。微多利いさらぬだ。涙のかわく間もなき。侯の書を見て。悲歎ふられり。やうく返書を書きた。めてこれをねくり。其情を慰<sup>メ</sup>めけり。此後法兵を盡<sup>ク</sup>く伊太利より撃却<sup>セ</sup>けられ。侯も亦釋<sup>ス</sup>され。ひとたび故郷<sup>ニ</sup>歸ることを得<sup>ル</sup>。程なく法兵大舉して。復<sup>タ</sup>び入攻<sup>ム</sup>る不及<sup>ク</sup>。巴以亞の戦<sup>ニ</sup>。侯を驍勇<sup>ニ</sup>を以て名を顯<sup>ス</sup>。大<sup>ニ</sup>敵軍を破<sup>リ</sup>。其賞功<sup>ニ</sup>稱<sup>ス</sup>ねば。心中娛<sup>ム</sup>まず不平を抱<sup>ク</sup>れ



りるを。當時法國の間諜密ヒのふ之を偵ウひ知り。掲  
 洛尼摩ロニモといふ之のをして。侯コウは説セツのしめけるを。  
 侯も一日耳曼ニを叛ハきて。法國に屬ツクしなば。其賞と  
 して那不勒ナブルの王國を與ユふべしと。ゆふは侯を之  
 を信シじて。心を傾カくるの色ありしを。微多利ウイトリ早  
 くもあまを察サツし。書を贈りて諫ケンめけるは。君必ず  
 掲洛尼摩ゲロニモの甘言カンゴンを欺ウきたまふな。君固く帝の  
 爲タメに忠義を竭ツクしたまひ。その芳名を王位を踐ツ  
 んよりも。迥ハルのふまさりぬべし。妾メカごころを不  
 義ウイにして。國王の妃ヒメと呼ヨむれんより。寧ムシロ忠勇無

雙ツにして。大國の諸王シヨウオウを打ウチ克カチたる。英雄名士の妻  
 と稱ナせられんことを本意なきと。ふといさま  
 しく有りけまば。侯コウを始ハジめて惑マドを釋トクき。ふよく日  
 耳曼帝ニ。無二の忠節を盡ツクし。微多利ウイトリこれを  
 喜ヨび。侯の高義を人ヒトに誇ホウりて。讚美サンビしけり。か  
 くて後。侯ハ米蘭ミランに在りて。數度の戦タケふ多くの傷キズ  
 を被カふり。且平生勤勞の過度なりしを。因ユり。身體  
 大オホに羸ツカき。爲タメに一命も危ヤブふさほど。ふ覺えけまば。  
 急書を贈りて。微多利ウイトリを迎ムカへんとせしめど。ふづ  
 きふも生前シゼンに相見ること能オモざるを慮オモり。從弟





西川金  
繪師



匪地難多妻の諫書と讀む



麻切士を招き遺言して。微多利の事どもをい  
 懇小附托せり。微多利ハ夫の病状を聞きやめて  
 那不勒をたちて。羅馬を過ぎ。威打堡小著きし時。  
 侯の訃音至りし。バ。悲歎遣る方なく。為し悶絶  
 まる小至まり。是より後。微多利を常小侯の事を  
 忘る。間なく。多くの詩小思ひを寄せて。自らの  
 心を慰めたり。伊太利の著書家某。其詩を評して  
 百多拉克といへる。有名なる詩人。又亞ぐ者とせ  
 り。其詩の中。最も世に稱せらるる者一首あり。  
 その畧。曰く。玉と一ぎ二人と心へど。吾身の君

のまに。吾身を夫のま小く。玉藻なすよりねし  
 之のを。君かくばなぞ身よををん。夫かくばな小  
 身のざらん。頸玉も手玉もあまど。よををねバ光  
 も見えす。かざらねバねとも聞えず。あなし。あも  
 吾をバねきて。いづく小り君のい小けん。うるは  
 しとねと。つる君の。聲だふもきこえずなりぬ。吾  
 聲を君は志まりや。なげ。どもなげどもきこふ。  
 いらつだふあらぬねと。吾も亦久小をあら  
 ト。此世小ありはてめや。あそれこの世小。と  
 どなげさける。あくて。微多利は。憂苦も沈みて年



月を送るふと。既<sup>レ</sup>七<sup>ノ</sup>年<sup>ハ</sup>及<sup>ビ</sup>び<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>齡<sup>尚</sup>三<sup>十</sup>五<sup>歳</sup>。て。つ<sup>く</sup>ろ<sup>ま</sup>ね<sup>ど</sup>天<sup>受</sup>の<sup>容</sup>色<sup>ハ</sup>身<sup>を</sup>は<sup>な</sup>ま<sup>ぎ</sup>ど。親<sup>族</sup>故<sup>舊</sup>も<sup>そ</sup>の<sup>不</sup>幸<sup>を</sup>憫<sup>ミ</sup>。再<sup>醮</sup>を<sup>勸</sup>む<sup>れ</sup>ど。あ<sup>ら</sup>く<sup>辭</sup>び<sup>て</sup>う<sup>け</sup>ひ<sup>ら</sup>ず。或<sup>時</sup>を<sup>以</sup>斯<sup>底</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>所</sup>に<sup>退</sup>住<sup>シ</sup>。或<sup>時</sup>ハ<sup>那</sup>不<sup>勒</sup>に<sup>隱</sup>居<sup>シ</sup>て。専<sup>ら</sup>亡<sup>夫</sup>の<sup>冥</sup>福<sup>を</sup>祈<sup>リ</sup>。伊<sup>太</sup>利<sup>ニ</sup>遊<sup>歴</sup>シ。羅<sup>馬</sup>に<sup>占</sup>居<sup>ト</sup>ト<sup>て</sup>。名<sup>僧</sup>智<sup>識</sup>と<sup>交</sup>む<sup>り</sup>。阿<sup>外</sup>多<sup>小</sup>趣<sup>キ</sup>。威<sup>打</sup>堡<sup>ト</sup>移<sup>リ</sup>。又<sup>三</sup>他<sup>加</sup>他<sup>隣</sup>の<sup>庵</sup>に<sup>幽</sup>居<sup>セ</sup>リ。此<sup>時</sup>英<sup>人</sup>教<sup>宰</sup>の<sup>重</sup>職<sup>保</sup>羅<sup>も</sup>亦<sup>此</sup>地<sup>に</sup>あ<sup>り</sup>ら<sup>ば</sup>。是<sup>と</sup>教<sup>法</sup>の<sup>上</sup>の<sup>交</sup>む<sup>り</sup>深<sup>り</sup>い<sup>ぶ</sup>。こ<sup>う</sup>を<sup>も</sup>さ<sup>り</sup>て<sup>復</sup>び

羅馬に歸り住<sup>ミ</sup>。五<sup>十</sup>七<sup>歳</sup>。ふ<sup>て</sup>身<sup>ま</sup>か<sup>り</sup>々<sup>り</sup>。こ<sup>ハ</sup>一<sup>千</sup>五<sup>百</sup>四<sup>十</sup>七<sup>年</sup>。て。當<sup>時</sup>微<sup>多</sup>利<sup>の</sup>德<sup>を</sup>讚<sup>美</sup>せ<sup>ぬ</sup>を<sup>な</sup>ら<sup>り</sup>き<sup>と</sup>ど。

安弗拉斯曼

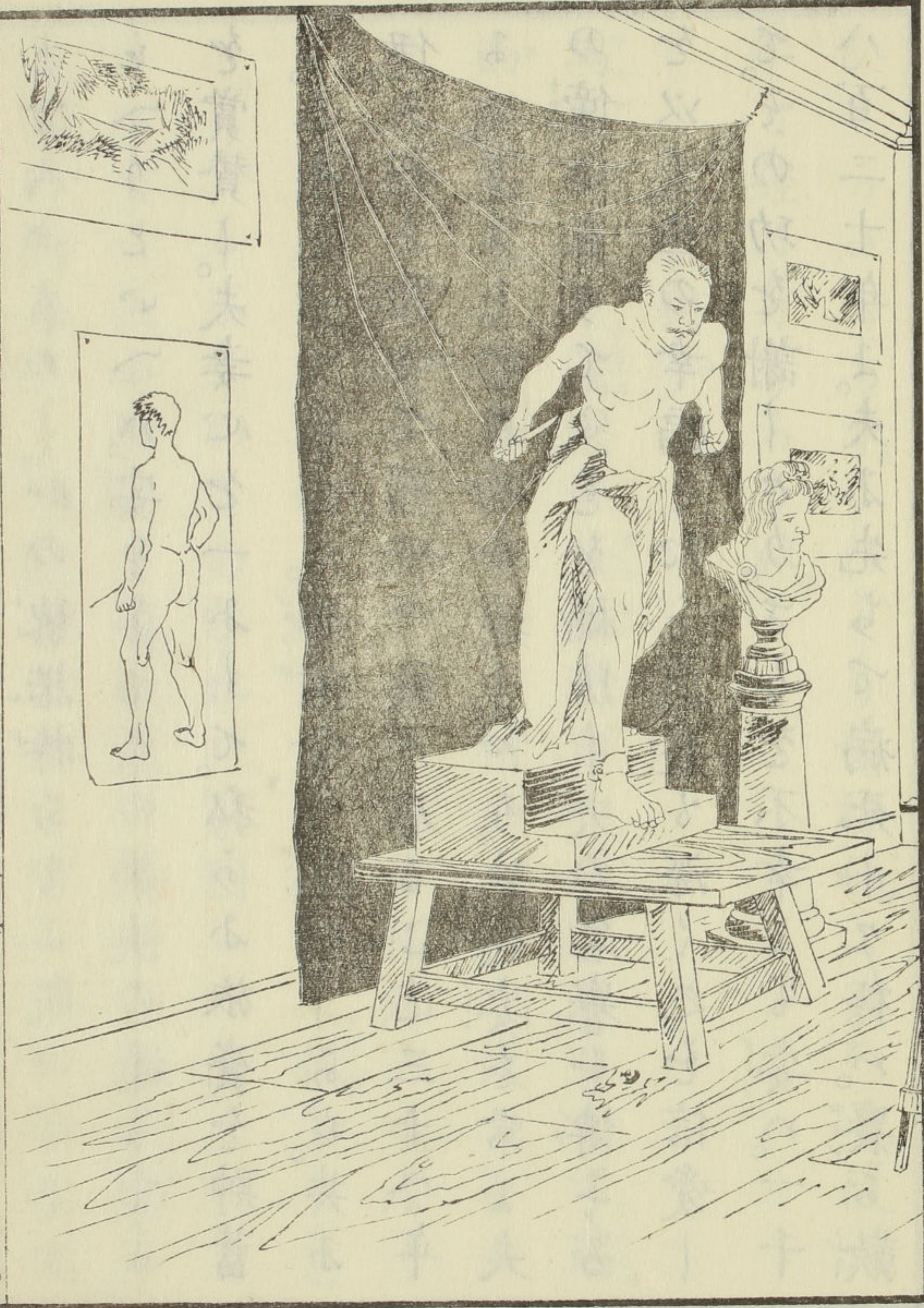
安弗<sup>ラ</sup>斯<sup>マ</sup>曼<sup>を</sup>。二<sup>十</sup>二<sup>歳</sup>。よ<sup>て</sup>。襄<sup>弗</sup>拉<sup>斯</sup>曼<sup>に</sup>嫁<sup>シ</sup>。能<sup>く</sup>そ<sup>の</sup>夫<sup>を</sup>助<sup>け</sup>て。遂<sup>に</sup>良<sup>工</sup>の<sup>名</sup>を<sup>得</sup>ら<sup>せ</sup>さ<sup>し</sup>め<sup>り</sup>。夫<sup>の</sup>襄<sup>後</sup>に<sup>安</sup>を<sup>補</sup>佐<sup>を</sup>得<sup>て</sup>。名<sup>高</sup>き<sup>彫</sup>像<sup>師</sup>と<sup>な</sup>ま<sup>り</sup>。始<sup>に</sup>安<sup>を</sup>娶<sup>り</sup>し<sup>こ</sup>ろ<sup>ハ</sup>。い<sup>と</sup>貪<sup>しく</sup>して。生<sup>計</sup>も<sup>も</sup>苦<sup>し</sup>む<sup>や</sup>ど<sup>な</sup>り<sup>し</sup>。安<sup>を</sup>柔<sup>順</sup>よ<sup>し</sup>て。才<sup>藝</sup>人<sup>に</sup>絶<sup>え</sup>。法<sup>蘭</sup>西<sup>に</sup>太<sup>利</sup>及<sup>希</sup>臘<sup>等</sup>諸



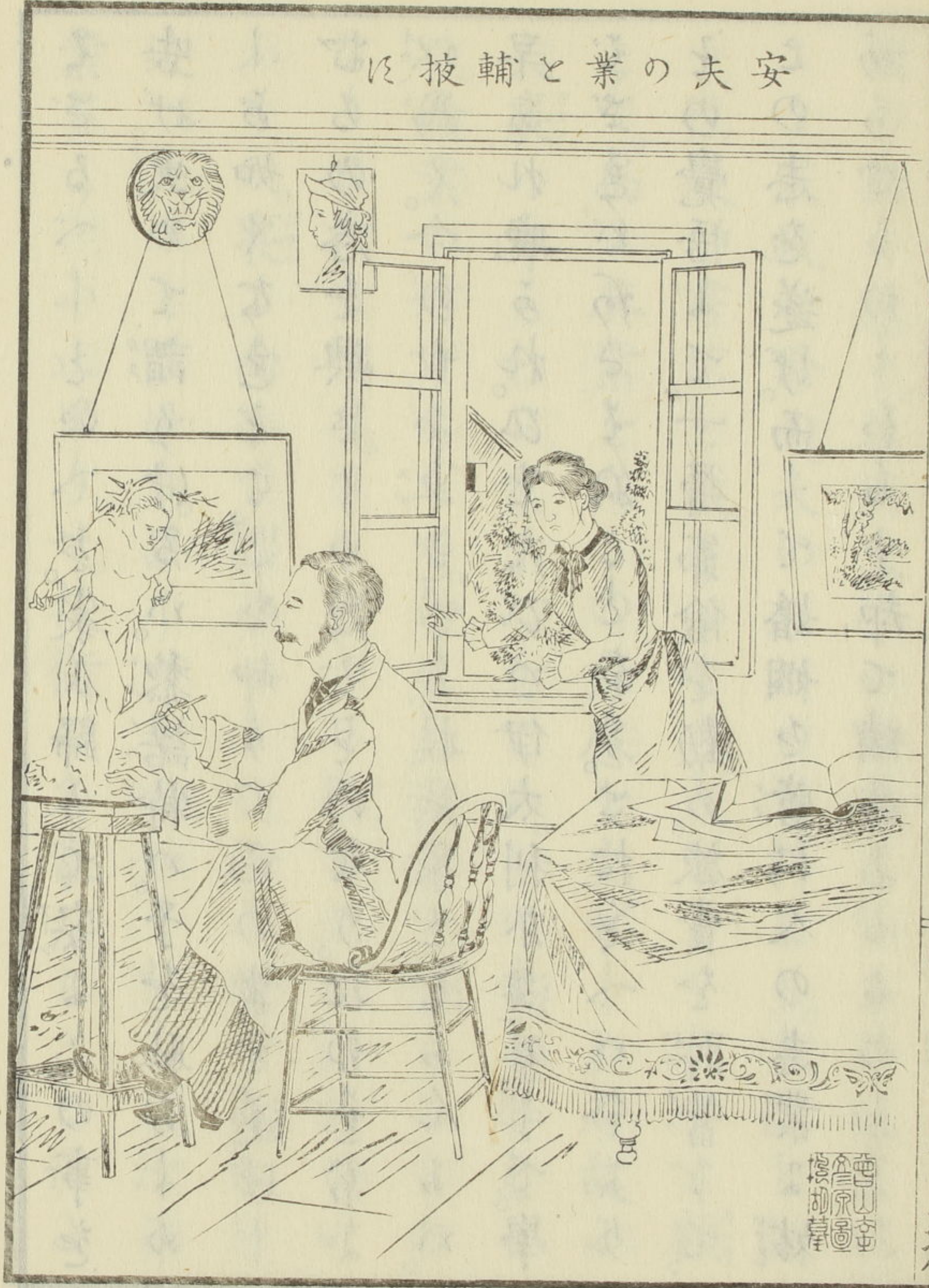
國の語不通。技術文學の嗜好さへありけむ。よく家政を修め。夫の彫刻の材料なる。畫圖を調。往復の書信を裁るなど。夫をして家事を顧。て。爲よ其業を怠るの念慮を生ぜしめむ。故。夫。襄の専らわら業。心をこめ。その妻を娶。修業の妨げならで。却てわら業を賛くる。なりとねもへり。ざるを一日約書亞黎諾特といふもの。襄。向ひて謂ひける。汝このごる妻を迎へたりときけり。果してその如くならバ。汝の業をく。小止まりて。技術の名家たること何と

とざるべしといへむ。家。歸りて安よこの事を告げ。更めて謂りける。黎諾特。予を耻しめし。お如くなまども。これを却りて己の業を遂げしむるの志を興さしめたる。そのなり。ねのま常。以爲く。今の世。小卓をうる。技術家とちらん。早。れ。晚。れ。ひ。と。た。び。伊。太。利。小。遊。歴。て。學。む。ま。い。何。と。ぬ。こ。と。あ。り。と。ね。と。へ。バ。今。よ。り。その覺悟よて。一層節儉を勤め。旅費を貯蓄して。この志を遂げ。而して婚姻を啻に人の志業。妨。何。ら。ざる。の。と。あ。ら。ず。却。て。補。益。あ。る。の。あ。る。ふ。





安  
夫  
の  
業  
と  
輔  
掖  
に



西  
山  
幸  
藏  
印



とを人小志めり。かの黎諾特レノトが言ふ報いんとを  
 せりといへば。安アインを喜で夫の果決の速なる  
 を賞賛し。夫妻心を一イツにして。私シの小旅資を貯蓄  
 し。五年を以てぞして。準備レイン全く整トひしのだ。共小  
 伊太利小詣りて同心一致し。居ること三十八年  
 みて。遂スよその目的を達トしり。此間安アインを常トふ夫  
 の傍カスラ小在りて。くきを補佐し。夫の名譽を博ハクする  
 を以て。己の幸福とをヒ。襄ザンも深く之を信愛し  
 て。その功を謝シしり。さるを不幸アインも安アイン。一千  
 八百二十年ニ。夫小先ちて病死シしり。襄ザンの歎ナキ

ひとヒとならず。これより精神頓ニカよ衰へて。後六  
 年を経て身ミのりぬ。

馬屈利多マルグ利多

馬屈利多マルグ利多。法國の汝拉州ヂュラのかさほとりみて。瑞  
 西國スも界カまる。山中の一小村の生ナり。後ノチもその  
 夫となりし伽士巴耳ガスバールとヒへるも同郷の生ナり  
 たり。兩人とも小幼コき時父母を喪ウシひて。孤ミナシとなを  
 たり。あハる不幸アインのヒなれば。家固より貧ヒかり  
 たり。あハども。互ヒ相扶サをて。敬愛の情ニと深く。竟ソレも  
 夫妻の約ヨクをヒて。艱苦を共ニせんことを誓チカひ



り。あつて兩人稍長かりて。前約を踐むべきの  
 期も近づきぬるを。もろらざりき。伽士巴耳を。何  
 る所石場よて。重傷を被り。日を経て愈えず。遂よ  
 盲て篤疾の人となきり。あつりれば。伽士巴耳  
 馬屈利多よ謂りけるを。吾不幸よして。かゝる不  
 具の人となれり。今を汝と前約を踐むこと何そ  
 ぞざるべけきば。汝を宜く他人を擇て。快樂を共  
 小まべし。吾一人の兒童を養ひて。その乞ふを  
 り此嚮導をなきしむべしと。以ひさとしりる小  
 馬屈利多らまをきく。なきさけびて志むしり答

もえせざりしを。やうく涙をばらひていひける  
 やう。今君の身の不幸小際まきばこそ。かゝる事  
 をも耳よひきけ。もしこの不幸をしてわが身小  
 何らしめむ。君の吾を棄んとあすると。いさくな  
 げさうらみしあは。伽士巴耳を此時既小眼なる  
 こと何そをねど。天よ向ひく答へける。そし然  
 ん時も吾の必汝を棄ト。神を即ちわが保證人な  
 りといひて。為よ前約を破るふとなく。遂よ合ガラキ登  
 の禮を行ひたり。あつりけきば。世の人あるひを  
 馬屈利多の行を笑ふものありあど。うらる何



るものハ。その節義を感賞せぬをなありけり。さてこゝろ老て後を。活計のたづさもなきほどなり。一ハ。この夫婦の名を傳へ聞くもの。相競ひて其を惠恤せし。かどハ。其幸福をぞ保ちたき。而して馬屈利多を柔順してよくその夫は法の一。品行端正にして。家事を治むるも秩序をみざさず。清潔を勉め。夫妻互に幸福を得し。おとどもをぞ。喜で人小のたりさるせしとぞ。

亞耳巴地侯の夫人

壹黎里亞の以度利亞と云ふ所の。水銀鑛山の鑛

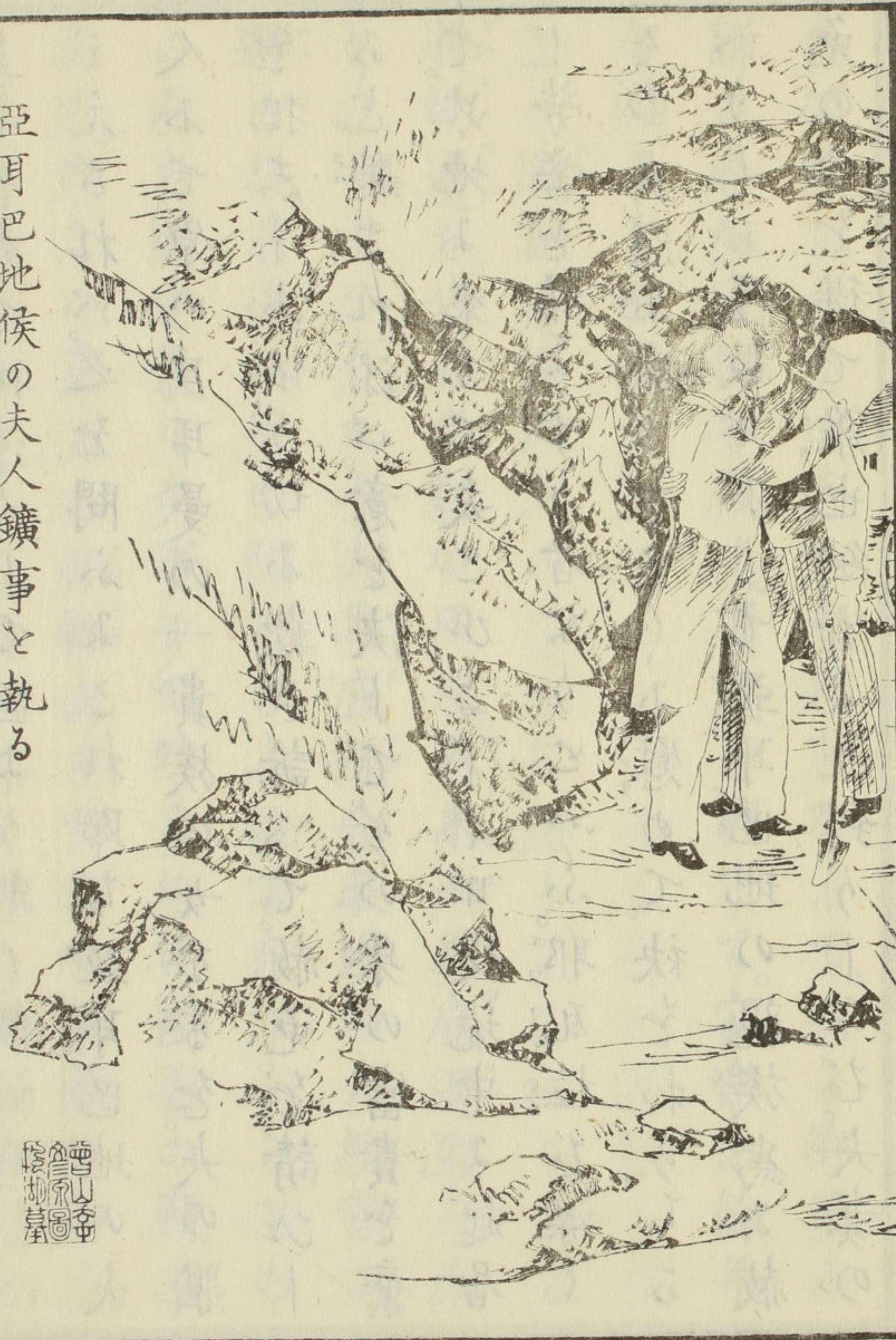
夫をこゝろ犯罪よりて。役せらるる者まで。實に人民中の不幸の極度とも云ふべし。こゝろ終始坑の中小起居して。天日を見るおと何とをねバ。為小面色土の如く。筋骨痿痺し。二年を以ておして。一命をよはるもの多しとぞ。一千七百七十六年のころ。耶瓦拉といふもの。亞カ伯山を越え。徳逸を経て。この鑛山小抵りし時の紀行を刊行せし。其の中一奇譚を載せし。そのを耶瓦拉鑛山の嚮道者よ伴られて坑中を巡見する小。めくく此地の罪人を處するの。慘狀小愕さし。おとひ



けなく背より。名を呼ぶとのあきば。怪しみて立  
 止り。之を顧まば。一人の男顔色極めて黒く。見る  
 だふゆゑしきふ。耶瓦拉エワラ小向ひて曰く。やよ耶瓦  
 拉君よ。君ハ余を見識せりや。否イヤと言へば。耶瓦拉  
 を眼を定めて熟視するふ。何を圖らん。その舊友  
 亞耳巴地アールバチ侯なれば。愈驚き。覺えず涙を流して。そ  
 の手を把り。君ハいゝあきばあゝる所も居り。か  
 ある姿よりなり果しぞ。故こそ何らめと問ひけ  
 れば。亞耳巴地も。少時ハ涙ふくれをるふ。これ小  
 答へて言けるハ。余曾て帝の命も背き。歩兵隊の

一將と私闘して。これより重傷を負せしあど。逃亡  
 して伊斯多利イストルの森林小身をひそめしあど。間も  
 なく捕縛せられしあ。又脱きて山賊の群小入り。  
 小をと居ること殆九月よりして。竟も復擒トクせら  
 れ。維也納府小送られて。已も車裂の刑も行なを  
 るべありしを。朋友親族の力も藉りて。僅も死を  
 減し。終身苦役の刑も當てらむ。其故を以て斯る  
 賤業も身を苦むるなり。と法むらふ小語りける  
 小。このそのあどりの間。年少き婦人來りて。始終  
 亞耳巴地アールバチの側を離さず。小をよむと垢アケ付てハあ





亞耳巴地侯の夫人鑛事と執る

婦如鑑卷之二 官内省藏

曹山幸 繪



こと眉秀で神清くして。固より卑しきそのとい  
 うんざれば。之を問ふ。これ即ち亞耳巴地の夫  
 人ふて。原ハ日耳曼の一貴族の女なるを。夫の罪  
 を犯志し小依り。切小歎き訴へて。赦免を請ひし  
 ろど。聽され絲バ。意を決して。その身の富貴を棄  
 て。此地より來りて。夫とひとしく日夜坑中より起居  
 し。勞苦を共よする者なりといふ。耶瓦拉を深く  
 その貞烈小感ト。さあぐ小慰めて。袂をわらちる  
 へりし。後數日小して亞耳巴地の親族。爲よ赦  
 免の令を得て。維也納府より到りし。あむ。夫妻の

喜び譬へるを。再生の思をなして。共よ郷里小  
 歸り。尋で官位を復す。資産を興して。安樂小餘年  
 を送りしとぞ。

脱勒邊夫人。北亞米利加の人。惹米士馬底遜の夫人  
 なり。一千八百九年。夫馬底遜合衆國の大統領小  
 選むれ。前後八年の間。その高位に在りし。その  
 らるを國中最も多事まで。外より英國との戦争  
 あり。内より黨派の軋轉ありて。互小仇敵の如く。  
 政府より抵抗をすること頗る劇しく。此間小處する



の實は至難なりとのふべし。さるをその夫人の  
 温顔優柔なる小より。各派反對の首領也。この夫  
 人の前は在りてい。不平の念慮忽ち小解け。顔色  
 怏々として相親り。宛るも氷雪の太陽は相け  
 る。如くなりけき。馬底遜の人望を得たるい。  
 全くその夫人の徳は因き。馬底遜を言寡く威  
 望ある人なれば。人あきを畏敬するよ止まねる  
 も。夫人を極めて強記して。ひとたび見聞した  
 る人を。其姓名聲色を記憶して。忘るることなし。  
 故小重ねてその人小逢へ。をちまちその曩小

何へるをりをねもひひで。之は應答するが故  
 也。人皆特殊の愛敬をうくる。そのとねをひて。倍  
 尊敬するの念慮を厚うせり。馬底遜大統領の後  
 期も満ちて後。故郷勿洛尼ガオルガニヤに歸り。蒙畢拉モントピラといひ  
 る。心と壯宏なる家よ住まひ。此時尚は老母あ  
 りけるが。身體を稍衰へし。氣力熾んふして。常  
 小書をよみて。之を樂しむけり。ある時人よ謂り  
 て曰く。わむねひたきど。今尚や無事小苦しむこ  
 となし。多くの書籍文章を。わむねひて多忙なら  
 しむ。又わむ身の幸福なる也。两眼未だ朦メラまむし



て一日の中よむ多くの書をみるを以て。まことお  
 き樂しとす。此他の事をいはらわらぬ婦の介抱  
 又依きり。されど今となりてい。わらぬ婦をバや  
 て。わらぬ母とおもへり。とぞありける。おのひと  
 言ふても。夫人の孝貞ふして溫柔なりしを知る  
 不足れり。されどある人の言ふ。夫人を容儀秀麗  
 ふして。人を動かし不足るも。尚之小勝りて。人を  
 感動せしむる者あり。その其姑も事る此状心切  
 りして。愛敬すべきの行儀あることあり。とぞか  
 たりける。馬底遜亦老て後人よ謂りける。わらぬ

脱靴との結婚の。終身わきを最大幸福の導びき  
 たりといへり。夫人一千八百四十九年の八月お  
 身おのりぬ。その喪に會するにのいと多ありし  
 とぞ。

任善徳弗の妻

徳逸國ふてある教法の會社を創めたる。伯爵任  
 善徳弗の妻の。いと高尚なる婦徳を備へし人お  
 て。夫任善徳弗の事業を助けしおと最多し。故よ  
 任善徳弗常小人よ謂りける。おのれ二十四年  
 の久しき經驗ふよりて。わらぬ業を成せり。此間妻



の助をうる事居多し。その功最大なり。それを善く家事を治めて内不顧みるの憂をのらしめ。而して己の悪念を除斥する所をり。心なる艱難困苦小遭遇するも。絶て怨むことなきのとならむ。己を助けて心は快樂の心をひあらしめ。よく彼が天稟の徳を擴め。これをして克く教法上の混亂を免るべきにたり。これ決めて他人の能くすべき事ならずとぞありし。

拔克蘭呼倍爾哈米爾敦の妻は、夫の業を助名高き地質學士拔克蘭の妻は、よく夫の業を助

け。又よくその子を教育せり。夫拔克蘭の爲に書を寫し。石類を蒐め。瓦片を補綴し。ある時を出版するところの。書中の圖畫を製するなど、いと殊勝なりき。その子弗蘭克父の著はせる書は序いで。母の徳を賞讚せり。それ概畧は。己の母心力を竭して。吾父の事業を助け。その間小これ等兒子を教育して怠らず。毎朝有用なる學問を授け。智識を發達せしむるを以て。課業と爲せり。故に今わが等の享るところの幸福を。己の母の恩恵小して。追感の情小堪へず。これ等よく貴く



りづゝに母ををてりし。又神の賜なりとぞ志  
 るしる。瑞西國の博物學者呼倍爾といへるを。十七歳の  
 時より盲者となりてゐるおと何ともぞ。故よそ  
 の妻の助よよきて。金石草木鳥獸等の學科不熟  
 達しぬ。その妻始のやどい夫の患苦を緩うし。  
 その心を慰めんとおもひて。學業を助をし。後  
 よい全く他の博物士と異なることなく。幸福安寧  
 みして。その業を遂げ。又壽を保つことを得しめ  
 たり。されば妻お眼の。やぶて夫お眼おして。常人

の見く腦裡に感ずるを。呼倍爾を耳に聽て感ず  
 るの差あるのと。故よわき再び目みるおとを得  
 たらば。あへりてわづらはしきふきへざるべし。  
 とぞおたりし。この呼倍爾の蜂を論ぶるの書  
 け。前人未發の説とも多く。二十五年の星霜を累  
 ねて。卒業せしそのなれ。實よ一大好著述と稱  
 せられ。讀むものよおそれ説の細密明晰あるお  
 感ぜざるおなし。おあしてこの著者の瞽者なる  
 おとをバ志るそのあらす。

壹丁堡大學校の論理學性理學の教師哈米爾頓



る妻も亦よく夫を助けてその職を全うせしめぬ。哈米爾頓五十六歳のとき。中風の症に罹り。起居進退あつろふ任せど。かくて後をその妻常々夫の手となり。目となり。こゝろともなりて。萬々の用をなせり。故に夫と思想を共におし。書を著し。書を校し。その口述するところを志るすなど。何事およらず做しうべきやどの事いこまよ從事して。夫の助とならざることをおし。かくてこそ哈米爾頓は。絶大の著作をば世におらはしたれ。哈米爾頓は天性放恣にして。事よ従ふ甚だ亂

雑して法度なかりし。妻よくその不足を補ひて。秩序を守らしめ。他人の侮を來さざりき。そのある時。哈米爾頓人と學事の競争をなし。後選をきて學師となりし。敵手のかさより。哈米爾頓は虚にして實なしといふ惡言をうけたり。此時その妻百方力をつくりて。其志おらざるを辯じ。選舉人の誤らざるを證明し。さて夫の爲に講義の材料を書し。毎夜こまをよと易きやうに浄書し。翌朝夫の用お供ふるなど。これを助けて急る事おのまし。哈米爾頓後よの講説の名家と



稱せられ。歐羅巴洲中の當時の大家と仰がれたり。

奈蒲爾彌爾發拉第の妻

德逸の著作家奈蒲爾の妻ハ。其心優しく。常に顔色を和らげて夫の心情を娛し。暇をりになれて心中快樂ならぬ状ある時などハ。殊にこころを用ゐて。これを慰むるなど。眞に夫を輔くるの婦徳を備へたり。されバ奈蒲爾人ハ謂りけるハ。この妻ハ。我が業の良友にて。溫柔の性親愛の情いと深ければ。我が性情を化して。

高尚の地位ハすくめ。塵世を出離するの心を以て。何れとむるハ。全く妻の恩恵なりと。ぞあこりし。さてその妻をつねハ歴史の上にて。新見出たるも。何れを國政經濟の事。文學ハ關ある新ら。しき事など。必夫の考案ハ。何れありけむ。バ。それが爲ま。たのづ。あら世の中の教となる事ども多ありけり。これ奈蒲爾を常に妻がこころ合へむと。たをひて著述せし。由りてあり。ハ。英國の潤斯丟亞的彌爾も。その妻の助小藉りて。學業を成就せり。その著書中。自由の理といへる



書など。なるをいその妻の力よりて成せりとぞ。されど此書の稿を脱せし時を。その妻既も身まのまじり。故おその書小題して曰く。しが妻のこの善き書物の趣向をたもひ立し人おて。まの半おまきが著述者なり。されど彼もこの為のよき友なり。まの妻あり。この卓識ありて真理を究めたる良友の力よりてこの書を何らそし。此功を遂げたり。いま此書なりて追感哀悼おたへず。とぞまきつをける。妻の恩恵をいふまはるる。發拉第夫婦を。終身幸福安寧よりていと睦ま

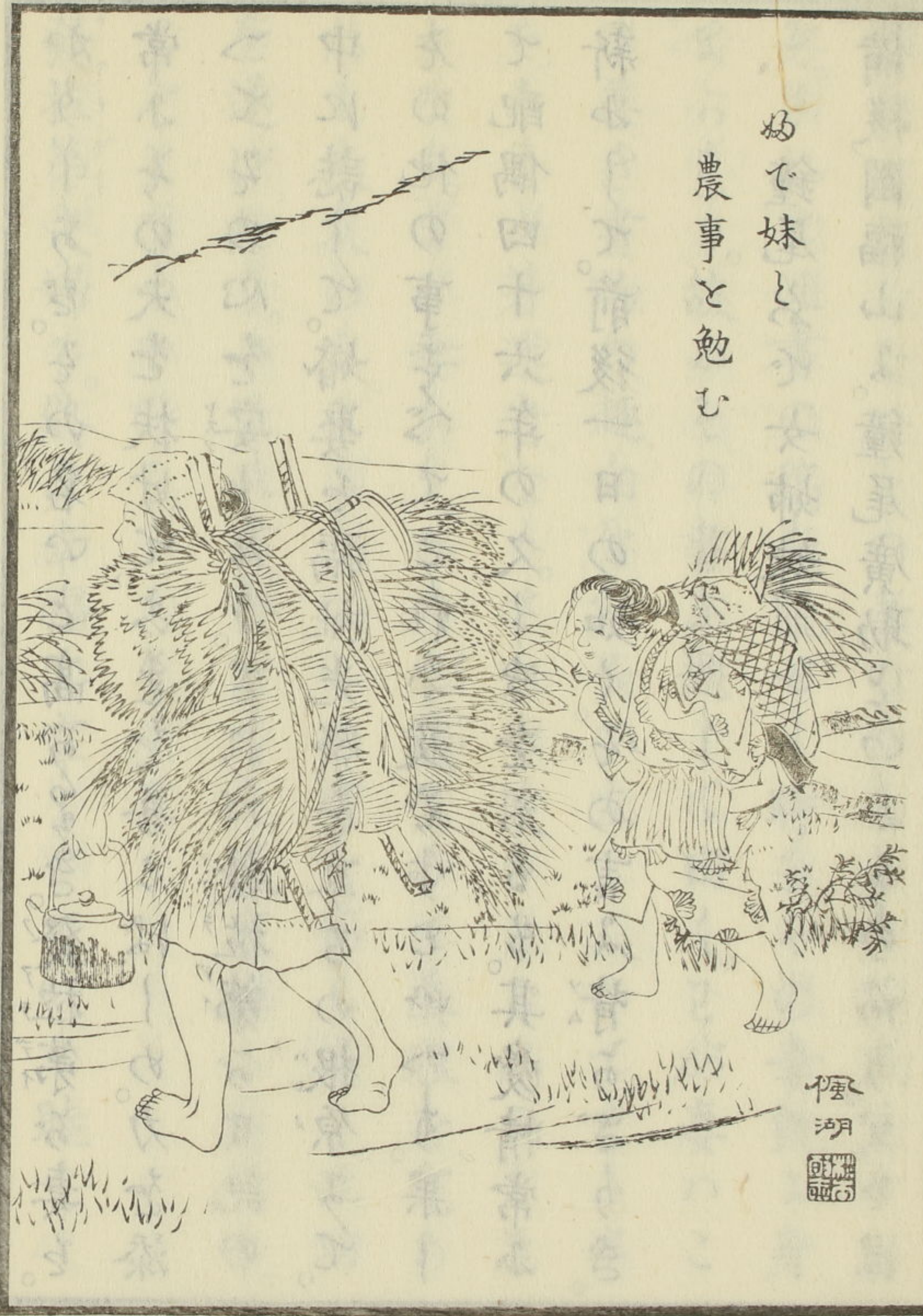
かりしを。その名いと高し。發拉第の妻を。常おその夫を扶けて。おまきを喜ばしめ。力を添へてその心を安んじたり。されば發拉第の日記の中に誌して。婚娶を福祉光榮を享るの根原にて。その他の事をべてこれお及む事とひへり。果して配偶四十六年の久しきをふるも。其愛情常お新おして。前後一日の如く。その言は背おざりき。

鐘尾ふで女姉妹

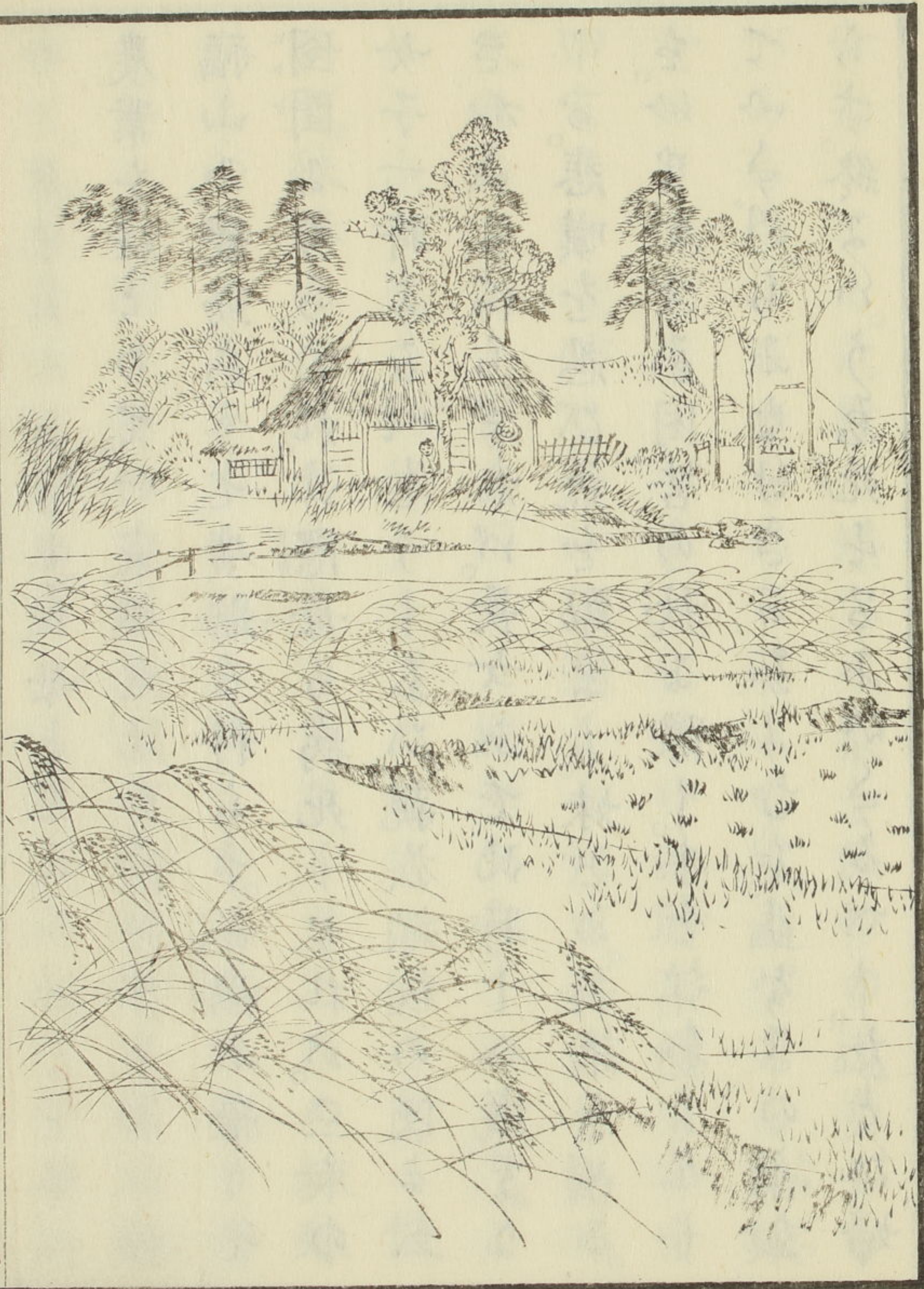
備後國福山よ。鐘尾廣助といふものあり。父をば



めで妹と  
農事と勉む



惺湖  
印





やく身まありふけき。母と三人の妹とを養ひ。農業をほとめて。一家の生活をはかりける。偶福山小變動ありて。廣助を料らす奇禍小罹りて。凶圖トキもとらされ。此際母も病死トキしなれば。三人の女子一時よるべをうトキふひ。親族縁故の便るべきかとも阿らざれば。長女ふで此時十八歳なり。悲嘆を忍び氣を勵まトキ。妹とめ小語りける。を。心まかトキふ困苦の秋トキも際し。手をむあトキうトキて。心まかトキらふなげきあトキむむ。益なきのトキあらず。終トキもいトキう急死トキするふトキさるべし。たとひ婦

女たりとも。危難小堪へて。家を保つトキの道なトキるべトキあらず。心トキざ力を阿トキせよとて。みづトキあトキら鋤トキ鋤トキをとりてたちいトキづまトキい。とめトキハ此時年僅トキら小十四なり。姉と共に田圃トキも申トキたて。耕作を勤め。末女みトキあトキふトキ家トキ阿トキりて絲をひトキあトキめり。これトキも十歳の幼穉トキかまトキども。能く二姉の志トキも倣ひて。殊勝の行トキひトキども多トキりき。あトキく三人の姉妹ひとりトキあトキるトキふトキかめトキ勵トキみトキあトキむ。公の租税も滞りなく上納トキし。耕作の餘暇トキもハ。機トキを織トキり絲を績トキぎて。兄の舊債を償トキひ。また夏冬トキあトキとトキふトキをりトキふトキか



ちくく新衣を調下。固圀は贈りて。兄の寒暑を救ひ。ねのれらひ常に貧苦は耐へて粗衣を着。粗食をまじ。朝を夙小起き。夜を早く戸を鎖して身を守りし。近隣の遊蕩少年輩も。敢て來り犯す。之のなく。其眞實友愛の行狀ねのづら官小聞え。其志を賞して金圓若干を賜ちせりとぞ。

二村清助妻衛女

飛驒國益田郡尾崎村の二村清助の妻なり。其家農事を主として。釀酒の業を兼ね。召遣ひの男女必とねはく。晝夜事繁き家なる小。衛女は

三十五歳の時。夫清助病小ありてほどなく死去せし。衛女十一歳の男子を首小三人の子を養育し。夫小代りて家事を治めたり。然るを衛女年猶若くして。殊小事繁き家小し。何まば。婦女の力能く之をさへうべくもあらねば。親族ども相まありて。清助の弟某を入きて後夫となし。家事小あらしめ。幼兒どもの生長を待たせ。然るべし。これを衛女小いひす。むる小。衛女いかにびていよく。稚兒を撫字するの固より。母たるにの。當然の務なれば。いふまでもなく。



家業の如きも婦女の手も。容易きわざならねど。夫よねくれて子なき幼なるを託す。幼を助けてその家を治むる事と。世間一般の事なきは。わらの愚なきとも身を法くして。よくそのかとき小堪へ侍らむ。はその後夫小見えむを婦女の教小違ひ。且世の人小對して耻べき事なきは。えこそうけおひ侍る事ト。れとのべらるるも。親族等も其志も感づてねをひたえぬ。さて後を衛女ハヤシよく勵みて。醸酒チヤウシユ小養蠶ヤウサン。其他百般の家事を經營す。亡夫清助の舊債。その額凡六百圓餘も何

りけるを。十年を以ておきて悉く償却す。竟小家産を恢復す。餘財を以て酒倉を増築す。三子とも稍成長せしむ。各その教育を怠らず。内外輯睦キツトクして。親疎の交際一も間然することなく。十有餘年一日の如く。其貞操を全うせしむ。郷黨これハを感賞せぬをたのりたり。

婦女鑑卷二終







